

英霊もそれを念じて亡くなったと思います。

子供達もよく頑張ってくれました。子供こそ大きな犠牲です。就職にも父親がいないと不利なことも多かった時代でした。子供に勇気づけられ、また嬉しいこともいろいろと与えてくれました。

長男は小、中学を通して級長で頑張りました、また五年生の時、健康優良児で朝日新聞に写真入りで掲載されました。これも励みになりました。次男は、勉強には力を入れなくて、高校三年間を通して柔道、体育に力を入れ、たくましく成長しました。二人とも優しい子供になってくれました。しかし、時には親のない淋しさもあったと思います。

次男は近くに同じ年の子供がお父さんとおぶさって銭湯に行くのを見て「僕にはなぜ、お父さんがいないの」と言って、親子で抱き合って泣いたこともありませう。子供も六十二歳、五十九歳になり、親の責任は果たしたような気になる最近です。

私たち厚木市遺族会婦人部は、毎年二月に一泊二日

で箱根で、神奈川県婦人部研修会を実施し、遺族会の火を消さないように頑張っています。そして最後に『靖国の妻』の歌を歌って解散しています。

私も三十一歳の折、郷里の県立高校に雇いで就職できまして、二年目に公務員の試験を受けて、県より会計と庶務の辞令を頂いて二十九年、定年まで勤めることができました。残り少なくなった余生を力いっぱい生き抜いていきたいと思っています。

戦争で父を、そして一年後に 母を病死で失って

神奈川県 三橋 功

私は昭和十四（一九三九）年一月一日に姉・私・妹・弟の兄弟四人の長男として生まれました。実際には、前年の十二月二十六日の生まれだそうですが、先々の徴兵検査のことなどを考えてのことだったようです。その二年後の昭和十六年十二月八日、真珠湾攻

撃により大東亜戦争に突入し、父は、昭和十九年六月十五日に麻布第八連隊に召集を受け出征しました。翌月の七月二十一日に私たち、祖父母、叔母、母と弟の五人と最後の面会に行きました。

確か暑い時だったと思います、まだ五歳になってちょっとでした。私たちが着くと父が、大勢の面会者の中を探してくれ、やっとの思いで面会ができました。その時に私が鼻をたらししていたのでしょう、鼻を拭いてくれたのは、私にとっては今でも忘れることができないことです。

また品川駅に向け、隊列を組み行進している中で、大勢の人が見送りに来ていた訳ですが、そのような中で父は、私たちを見つけて、ここにいるぞとばかりに小銃を高々と上げ合図し、私たちの前を通り過ぎていったのが、それが本当の最後でした。

そして私が昭和二十年四月に、六歳で小学校へ入学したところから戦況が非常に悪くなり、毎日のようにアメリカの戦闘機が飛来し、その都度防空壕に入りまし

た。たまには逃げ遅れて机の下に入ったこともありま
す。六月頃に入ると昼間でも上空をB29の編隊が、い
までは旅客機が高く飛んで行くのと同じように、何機
も東京、横浜方面に飛んで行くのが肉眼でも確認でき
ました。そして夜になると東の空が真っ赤に染まった
のを見て、祖父たちに説明を受けた記憶があります。

八月十五日、戦争も終わり、戦地より復員してくる
人達も多くなり、父たちも元気で私たちの元に帰って
来るのを信じ待っていました。その後、母は幼い弟が
病弱のため近くの病院に行き、帰りに雨に濡れたのが
原因で体調を崩し厚木の病院に入院しましたが、当時
は昭和二十年代、食べ物も少なく、病院でも薬も少な
い状態で、そのため祖父は、東京・横浜方面に薬があ
ると聞けば薬を求めに歩きました。しかし、そのよう
な家族の願いも届かず、母は昭和二十一年四月二十一
日に、父と一週間足らずの一年違いということで、亡
くなりました。両親を失ったことになりました。その
後、我々兄弟四人は、祖父母、叔父夫婦に育てられま
した。

その後、父は、昭和二十年四月十五日、フィリピン・セブ島にて戦死の報を受け、昭和二十三年九月に、中には何も入っていない白木の箱が帰りました。

同年九月二十三日父の葬儀を行いました。ただ私は覚えていますが、幼い妹、弟達は父、母の顔は、写真でしか知りません。

こうして私たちは、叔父夫婦には大変な苦勞を掛け、育てられたと思います。時には親がいればと、寂しく思うこともありました。私は学校卒業後、叔父と農業をしていました。昭和三十二年頃より厚木付近は工業化が進み、農業ではこの先生活も難しくなると思います、昭和三十五年より会社に勤めることにしました。

サラリーマンとなり、その後兄弟達も結婚し、叔父夫婦には大変世話になったことを感謝しています。

三十三回忌が過ぎた後に、戦地で一緒だったという横須賀の小林さんという方から、父の墓参りをしたいとお話がありました。その時、皆に寄って頂いて、その小林さんの記憶を元に父の当時の話を、私たちは

聞くことができました。当時、私は三十五、六歳だったと思います。父が亡くなったとされるセブ島は、マニラに次ぐ重要拠点であったため、アメリカの攻撃も激烈を極め、日本も相当の軍隊を置いていたとのことでした。そして四月十五日の戦闘は激しく、四月十六日には全部隊は指定の撤退場所に集まったが、そこには父の姿が無かったといわれ、多分、四月十五日に戦死したのではないかと聞かされました。

その時、兄弟で一度はセブ島に墓参りに行こうと誓って、平成九（一九九七）年、叔父夫婦、兄弟夫婦でセブ島へ行きました。セブ島近くになると自然に涙が出てきて胸を締め付けられる思いでした。やっと父の眠る地に来ることができたと思うのも束の間、現地ガイドとの連絡の行き違いで、父の最期であろうという所には行けず、前に厚生省の調査団で来たことのある姉の記憶を頼りに、やっとの思いでセブ観音（セブで戦死した人達の霊が祭られている）にたどりつき、ここだけでもお参りする事ができました。持参し

た、塔婆や母の写真、好物だった物をお供えお参りし涙に暮れました。また必ず来ることを誓い帰国しました。

その後、平成十年十二月、遺児ばかりで約百人、役員入れて百二十人の慰霊友好親善訪問団一員として、その一班は団長ほか二十人の遺児でネグロス島三カ所を参拝し、翌日父が亡くなったセブ島三カ所、父が戦死したと思われる洞窟を探し、それらしい所に行くことができました。しかし、五十数年経つと現況が変わり、洞窟と見られる一部を残し開発されて民有地となっており、入る事ができず、お参りする事もできませんでした。

やむなく司令部があったといわれる山で追悼式をすることにし、バスで行く途中、突然の豪雨にまわれ、道は川のようになり、やむなく前回訪れたセブ観音の下にあった遊技場の一部を借りて、そこで追悼式を行いました。その時も雨が止まず、これも父の涙雨と思い、父の思い出や、近況を報告し涙が止まらな

かったものです。

この訪問団は友好親善ですので、翌日もミンダナオ島にも渡り、全員がそれぞれの父を偲んで、行く所々で涙を拭き拭き『ふるさと』の歌を唄い、各地で追悼式を行いました。また三時間掛って近くの小学校を訪問し皆で持ち寄った学用品を子供たち（約百人に）にプレゼントしました。そこは舗装もなく橋もない、筏やロープで渡るような田舎で、戦後の貧しかった当時の私たちの頃を思い出しました（子供たちの履き物はゴム草履程度）。ガイドの話によりますと、当時、川は真っ赤になるほど血が流れたということでした。

最近ではアフガニスタンの子供たちのテレビ映像を見ると当時の日本も同じです。また、毎年八月十五日が近くなると靖国神社に参拝する、しない、の事が問題になりますが、私たち遺児としては残念に思います。

これは親を思う気持ち、子供を思う気持ちは誰でも同じだと思えます。そして、現在の日本があるのは、このような大勢の方々の犠牲の上にあることを、忘れないでほしいと思えます。